



Salamander
in
the circle

第二十一章 メッサナの黄金郷

峯村 明

Salamander in the circle

第二十一章の登場人物		
ダーヴェ	……	学術調査団の団長
ヒューダー	……	学術調査団の団員
イリチャ	……	ヒューダーが名付けた少年
ヘルガ	……	エウメロス王国の王女
スクナ	……	世界の果ての島の王に仕える者 コタエの兄
バイスロイ	……	黄金門の皇帝の息子
ヤスウ	……	学術調査団の団員
マミヤ	……	ホシナ族の娘
コモラ	……	メッサナ前総督の顧問
パルダリス	……	メッサナ総督家の一人 臨時総督代理
メンドルプ	……	メッサナ化学者集団の代表

これまでの主な登場人物					
ネウトラ評議会	ハイヤーン	本部科学者のリーダー	世界の果ての島	ホシナ	ホシナ族の族長 マミヤの父
	ティコ	科学者		オマキ	ホシナの妻
	ナシル	本部・事務職員		キト・コマ	ホシナ族の男たち
エウメロス王国	レル・ヴァリス	王宮付近衛隊長		ゴン	ホシナ族の男 (ヤサカオ族出身)
	ヴァリス将軍	レルの父		サノヒコ	王に仕える役人
	カール	王子 ヘルガの弟		アマセオ	シトリ族の後継者だったが追放された
	ロウナス	國務省の高官		カガセオ	アマセオの弟
	アンテロ	レルの副官		ヤサカオ	ヤサカオ族の族長
ケストル王国	摂政	亡國王の弟		チドリ	アマセオの妻
	パウル	國王		ハマツ	チドリの養父
	ウルリク	第三王子	タマシギ	ハマツの息子	
	ヘンリク	ウルリクの息子	オモイカネ	王に仕える者 日鏡み	
黄金門市	ホベオク	ケストル人の美女	フツヌシ	王に仕える者 将軍	
	皇帝	皇帝	ミツハ	メッサナから亡命後のメルノの偽名	
	パソネル	バイスロイの参謀			
冥界	冥界王	冥界の王	メッサナ市	バンテオラ	メッサナ市の総督
	ベネトナシュ	死神		バラム&バランケ	双子のジャガー バンテオラの部下
	テクトリ	最下層ミクトランの主		メルノ	音楽家

目次

メッサナの黄金郷

333.

334.

335.

336.

337.

338.

339.

340.

341.

342.

343.

344.

345.

346.

back number

第二十一章のあとがき

奥付

メッサナの黄金郷

333.

(え……どうのこと??)

ベネトナシュは己の目を疑った。

(たしかに、あの子だよね……イリチャとかいう……ったく、おかしな名前をつけたものさ、i (アイ) が三つも続いて言いにくいったらありゃしない。つけた奴の顔が見たいよ。それにしたってね……前は目ばかりでっかくて、もっとひょろひょろしてたよねえ……)

それが今では見違えるように手足がしっかりしている。

(いやいや、問題はそこじゃない！ そんなことじゃないんだ！ なんて、あの女にそっくりなんだ!?)

もっとよく見たいのだが、コウモリは勝手に視たモノを勝手に送ってくるだけである。ベネトナシュの視たいモノを視てくれるわけではない。

(ええええい、もっと近寄れ！ もっと右だ！ おっさんはどうでもいい！ そんなものは視たくない!!)

ベネトナシュはイライラとホウキを振り回し、しまいには力任せにぼっきりと折っぼしょってしまった。

(いけないいけない、テクトリお婆さんの贈り物は、邪険に扱おうと贈り主に言いつけるもんな)

大慌てで魔法を使って元通りにし、(今のは忘れておくれ) となだめすかす。

(おちつけおちつけベネトナシュ。これは——使えるかもしれない。起死回生の、一大チャンスかもしれない——！)

334.

ヒューダーが近辺の探索に出かけるというので、スクナは同行を申し出た。頭を打ち、脚をケガしてからほとんど歩いていなかったから、本来あるべき状態への回復が必要だった。斑(まだら)ジャガーのバランケが後をついてくる。ゆらゆらと長いしっぽを揺らしながら。

世界の果ての島を訪問した際、ヒューダーはかの国の王の臣下数人と顔を合わせているが、スクナとは初対面だった。

「そのころ、たまたま東北地方を放浪中だったのだ。そんな大事件が起こっているとわかっていたら、飛んで帰ったものを！」と、スクナは無念を隠さず吐露した。そして、巨人ダイドラボッチと親交のあったホシナ族に起こった事件の顛末を語った。ホシナ族全員がすでにかの地を去ったことをも。

ヒューダーはその告白を黙って聞き、受け入れ、長い沈黙のあと、呟くように言った。「ダイドラボッチが、気の毒だ」、と。

スクナは驚いた。ヒューダーは胸板厚く、手足は長く、美しいとさえいえる筋肉に覆われている。どうすればこんな肉体になるのか不思議なくらいだが、本人にいわせれば単に、「生まれつきなのだ」そうだ。どう見ても鍛えに鍛えた剣闘士の体格、そのう

え、肌はミクトランの薄明のなかでははっきりしないが、エウメロス人のような白色ではなく、赤銅色のような。日光のもとに出れば、さぞかし見事に輝くことだろう。まあ、惚れ惚れするような美丈夫である。そんな男が呟くには感傷的にすぎると思える一言だった。

「ホシナ族がほんとうにダイダラボッチと親しく付き合っていたことを、オレは身をもって知っている……」

「同感ですな。彼は地母神的存在であるゆえ、かの地に不在の間は、人も獣もかなり荒れていたのですわ。遠く離れた土地で偶然見つけて送り返したところ、騒ぎはすっかり収まったのだった。しかし、原住の人々はダイダラボッチのことをよく知らぬ。獣が荒れる原因はホシナ族のせいではないかと疑う者もいた。原住の人々とは私を含めてだが」

「……………」

「ホシナ族はずっと北方から来て、うると菜栽培のためにあの峻厳な土地を王から賜り、ダイダラボッチと一緒に開墾したのだ。繋がりが深いのも当然。彼は地母神的存在であるゆえ、かの地を動くことはできない。動けば現地に大きな混乱とおそらく、衰退を招くだろう」

ホシナ族出奔の際、ダイダラボッチに別れを告げる余裕はなかった。もしその機会があったら、ホシナ族も、ダイダラボッチ本人も、行動を共にしたいと欲したのではないか。

そう思うと、スクナの口からやるせないため息が漏れた。

「我々は星が導くまま、南へ——」

世界の果ての島での別れ際、ホシナはそんなことをつぶやいていた。あまりに突拍子もなく、なんのことかわからなかったヒューダーは聞き流してしまったのだが、今はそ

れが現実になっているらしい。

(ホシナ族南行きの目的とは、マミヤに合流することなのだろうか……しかしメッサナは封鎖されている…… 王の船で南へ向かったホシナ族は現在、風光明媚な火山島で逗留中だという。もしかすると、メッサナの封鎖と関係があるのかもしれない)

335.

「ダーヴェ先生ごめんなさい！」

イリチャはがばっと地面にひれ伏し、額をこすりつけた。

「ぼく、ヤスウがメッサナにいることすっかり忘れてました！！ 黙っててごめんなさい！！」

ダーヴェはきょとんとし、破顔し、声をひそめた。「いやいや、実はね、そのことあなたから聞いたような気がするんです。でも次々といろんなことが起こるんで、どっか行っちゃったんですね。忘れてたのは私のほうですね」

「え。それってちょっとひどくないですか。ヤスウかわいそう」

「ははは。まったく。でも、知ったところでどうにもなりませんから」

「それもそーですね」

かわいそうなヤスウの話題で能天気な笑いあっている彼らを横目に、ヘルガはバイスロイに詰め寄っていた。黄金門の黄金の首飾りを返すと言って。

「もとはといえば、バイスロイさまをお助けするために皇帝陛下からお預かりしたものです。お返ししたいのですが、外し方がわからないのです」

ほとんど呪いのアイテムである。

ヘルガの胸を飾っている首飾りに目をやり、バイスロイは「うーむ」と唸った。「あいにく、外し方は私も知らぬ。それは『皇帝の徴（しるし）』だから」

「——『黄金門の徴』ではないのですか？」

「『黄金門の皇帝の徴』だ。それをつけている者はすなわち——それゆえ、なんぴとたりともそなたに手出しできぬということである」

バイスロイはしゃちほこぼってそう言った。

336.

エウメロスの王女がつけている首飾りは『黄金門の徴』に似ているが、どういうことだろう？ ひょっとして、エウメロス王国と黄金門市とで婚姻関係が結ばれたということだろうか？ それにしてはヘルガとバイスロイとはなにげによそよそしいぞ？ などなどダーヴェは頭を悩ませていたのだったが、彼女らの話にこっそり聞き耳をたてて盗み聞きしてようやく、そういうことだったのか、と合点がいったのだった。

『黄金門の徴』をもつ者に対して何者も手出しはできないとバイスロイは言う。

（はたしてそれは、ここミクトランでも有効なのかどうか……）

効果はあるかもしれないし、ないかもしれない。しかし、ここへきて加わったバイスロイたち三人の存在は少々重かった。なんといってもやんごとない黄金門の関係者、あだやおろそかに接することなどできるわけがない。ということは、お守りしなければならないのだ。自分らの身を守りながら探索に励んでいたところへさらに仕事が増えたわけである。

（ご自分の身はご自分で、というのが、こちらとしては助かるんですがねえ）ダーヴェ

はそう考えていた。

「さて皆さん。我々も出発しましょう」

ヒューダーとスクナの先発からしばらくして、ダーヴェは立ち上がった。

337.

「時に、ヒューダーどの」、とスクナは改まった態度で話題を変えた。「貴殿が命名者であるという、あの少年のことなのだが」

「……イリチャのこと？」

話題にあげるのに思いきりが要ったスクナである。話題にされたくないかもしれないし、もし相手が難色を示すようなら引き下がるしかなかろうと思っていた。ひょっとしたら、言葉通り、ヒューダーは少年の父親かもしれないのだ。

ヒューダーは、はた、といった様子でいきなり立ち止まった。ちょっと予想外の反応だったのでスクナは思わず息を呑んだ。「ど、どうされた!？」

「いや——」ヒューダーはしばらく考えを巡らせてからスクナをみて、「スクナどののはアレのことをなにかご存知なのか？」と尋ねた。スクナは正直に、「いやいや、なんにも。だが——」そこまで言って、彼によく似た娘を知っていると続けようかどうか迷った。迷っているうちにヒューダーは話し始めた。「オレが初めてアレを見つけたのは、ホシナの郷なのだ」

*

「古い、古い、言い伝えがある。火の神と水の女神とが子を成した。火の神には妻が何人もいて、そのひとりが嫉妬のあまり、神々に注進した。水の女神の子が神々に反乱を企てるだろうと。たしかに、その子は水神を母に持ちながら父をも超える火の力を持っていた。赤子がぐずると、火災が起こって世界を半分燃やしてしまったのだ。怖れた神々は名前を取り上げたうえに、非力な水棲動物に姿を変えた」

「ふ……む……その話は初耳だ……」

「古い言い伝えであるゆえ、別のヴァージョンもある。火の神の妻のひとりが水の女神の美しさに嫉妬し、あらぬ噂を吹聴した。火の神の寵愛にもかかわらず、女神が外で不貞を働き、子を成したと。女神は噂に苦しんで火の神のもとを去ったという。この話はここまでで、水棲動物の話は出てこない。

ほかにもいくつかあるが、どれも大きな違いはない。しかし、最初の話だけは違う。

神々は母親の嘆きの大きいのを憐れんで、水棲動物を破邪の水の中へ沈めたというのだ。信じられんかもしれんが、スクナどの、イリチャは最初からあの姿だったのではないのだ。イモリ……水棲動物だったのだ。イモリは黒曜石の破片で埋まった沢の中で見つけられた。黒曜石は別名、破邪の石でもある」

「すまぬ、ちょっと待ってくだされ。火神と水神との間に生まれた子供がいて、大きな力を持っていたゆえに、神々に封じられた。そして水棲動物に変えられ、破邪の水の中へ。で、あのイリチャ少年は元は黒曜石の破片で埋まった沢に棲むイモリだった、と？」

338.

遠い目でヒューダーは語る。「ホシナの郷の沢でマミヤが見つけたのだ。そのせいだろうが、マミヤにえらくなついていた。それどころか、遠く隔たったマミヤの身に迫っている危険を、ホシナ族の者に訴えるということまでしたのだ。そのときは動物のカンというのは大したものだからに思っただけだったが、直後にマミヤが姿を消してしまった。くだんの転送システムに吸い込まれてしまったのだな。オレはすぐに航空機で追跡を開始した。イモリはオレについてきて、航空機内で地球儀の上に乗ってマミヤの行方を指し示した……」

スクナは疑わしい思いで語り手を眺めずにいられない。

「——結局、イモリが示した場所にマミヤは本当に、いた。動物のKANは正しかったし、マミヤを慕う心は大海をもものとしなかったのだ。そして……人間の姿をとった彼は、『名前』というものを知らなかった。名前をもっていなかったのだ。それでオレは彼に名前をつけた。イリチャという」

「……そういうわけでござったか……実は、ヒューダーどの、私は目の前で彼が変身するところを目撃している」

ヒューダーは、えっ、とスクナを振り向いた。「では、あの姿もご存知か？」

「うむ。白い翼竜だろう？ いや、いろいろとわからなかったがようやく、得心がいった思いだ。そうか、すると彼は水神、竜の子なのか！」

「……同時に、火の神の子でもある」

「その、両親の話を、彼は知っているのか!？」

頭をふるヒューダーである。「それとなく聞いてはみたが、イリチャは自分の本当の両親というものにまったく関心も興味も情も持っていない。彼が心から慕っているのはマミヤだけなのだ」

「なんということだ——、ヒューダーどの、口にするべきか否か迷っていたのだが、打ち明けよう。私はイリチャの身内と思われる娘を知っている。もしかしたら彼女らは親子ではなかろうか。そしてだ、彼女はメッサナで迫害された音楽家でもあるのだ——！」

ヒューダーがイリチャを伴ってメッサナ入りしパンテオラ総督と面会したのは、そのおぞましい事件が起きる前のことだった。

それから彼はイリチャを残して単身ダーヴェの跡を追った。そのイリチャはヘルガ王女とマミヤを救うためにケストル-エウメロス国境へと飛んでいたのもメッサナで起こった騒動をまるで知らない。

だから彼は今初めて事件の詳細をスクナというまったく見当違いの方向から聞くことになったのである。しかもスクナはメッサナを逃げ出した音楽家メルノと彼女を助けたヤスウをも保護し、結局、メルノはスクナとともに世界の果ての島へ向かい、ホシナ族のもとへ身を寄せたというのだ。

ヒューダーは顔をしかめずにいられない。「スクナどの……詳しい話をしてもらって聞いてなんなのだが……その音楽家メルノがイリチャの身内だといわれるか？」

「いかにも」

「何故」

「ふたりはそっくりなのだ。彼女は黒い目、黒い髪、あの少年と色の違いはあるがな。顔かたち、骨格、雰囲気、血縁関係があると思えん」

「メルノという名からしてメッサナ出身者。貴公、メッサナ人の特徴をご存知か。男女問わずけっこう背丈があり、厚みのある立体的な体つきをし、髪も肌も輝くような金色だ。しかし年齢的なものもあるかもしれぬが、イリチャは小柄できゃしゃ。貴公が知っておられるその娘もそういう体つきで、目も髪も黒いのだろうか？」

「それは……うむ、たしかにおかしいな……ああそうだ、私は彼女に偽名を名乗るよう勧めた。メルノというのは変わった名で目立つし、追手がかかるやもしれんのでな。すると彼女は、ミツハとよんでくれと言った……」

ヒューダーは思わず顔をあげてスクナを見た。「ミツハ!？」

「そう、メルノという娘は泥沼で猛獣に喰われ、骨も残さず、死んだ。自分のことはミツハとよんでくれと言ったのだ」

「土から立ち上がる初々しい芽吹き。すらりと宙へ伸びる植物の葉。ゆるやかな曲線はどこまでも弧を描いて渦を巻く。生命の始まり。始原。そして清新な原初の水しぶき。『ミツハ』という音はそういう生命と水に関する意味を持っている。すなわち——水の精霊——」

スクナは魅入られたように耳を傾けていた。眼の前を小さなコウモリが横切り、煩わしくて、彼は手を振ってそれを跳ねのけた。

339.

顔面を殴りつけられたような衝撃に、ベネトナシュはぐらっと体を泳がせて無様に尻もちをついた。しばらく呆けていたが、おもむろにきよろきよろとあたりを見回す。今の誰かを見られなかったか心配になったのだ。

「だ、誰にもみられなかったようだ、おのれ、このベネトナシュさまを殴ってくれるとは！！」

殴られたのはベネトナシュではない。コウモリである。

「あのおっさん、なんという名だ！ 覚えておいてあとでたっぷりお返しをしてやらねば！ ああ、やにわに忙しくなってきた！」

地べたに座り込んだ彼は目をギラギラさせて腕を組んだ。

「ここはひとつ、腰を落ち着けて考えなくちゃね。どうもおかしい。世界の果ての島で遊んでいる間になにかあったらしい。ウルリクとは連絡とれないし、ヘルガ王女がこんなところにいるのは計画通りにお亡くなりになってくださったということか？ それにしても相変わらずお美しい。あの美しさがもうしばらくすれば見るも無残な、それこそ百年の恋もいっぺんに冷めるという姿になってしまうのだから、いやはや、罪なところさ、ミクトランは。

さて、問題はイリチャくんだ。……いいことを聞かせてもらったよ……」

彼のキラキラした目はやがてワクワクと期待と悦びに輝きだした。

340.

メッサナが知と美の殿堂と呼ばれていたのはそう遠い昔のことではない。金色に輝く総督府の大ピラミッド、メッサナ・ブルーと呼ばれる爽やかな青色をした家々、建ち並ぶ集合住宅には学ぶ喜びに満ちた学生たちが暮らし、人々は明るくさんざめき、街路には強い日差しを浴びて丈高いシュロが涼し気な影を落としていた。

総督府に君臨した美貌の総督も、美しい街々も、今はない。

ほとんど全市民が力を合わせるようにしてひとりの音楽学校の学生を街から追い出し、彼女が住んでいた集合住宅、実家に放火するという、大狂乱が過ぎ去ったあと、熱気は急速に冷めていった。

まるで憑きものが落ちたように人々は我に返り、住宅地の一角に焼け落ちた邸宅を見た。

建物の開口部は開けることができないように事前に外側から閉じられていた。住人は焼却炉と化した石造りの建物から避難することさえできなかったのだ。放火された集合住宅でも同じことが起こっていた。いったい何人が犠牲になったのか。邸宅には家族、使用人ふくめて数十人、集合住宅にも数十人が居住していた。何人どころか、何十人という数の、いったいなんの罪があるのかという人たちを、市民総出で、事前の警告もなく、焼き殺したのである。

この事件はすぐさま、本家筋であるアンベレオ王国へ伝わった。すぐさまアンベレオから軍隊がやって来て総督府の人も物資も根こそぎ本国へ持ち去り、数日後には、責を問われたパンテオラ総督が刑に処された。

そして再び軍隊がやってきた。一連の事件を調査し、実行犯を探し出そうというのである。その結果、焦点であった音楽生メルノの衣類の一部が郊外の沼で発見されて死亡

したものを見なされ、彼女に直接関わっていた知人、友人たち、逃走を手伝った者も、端から参考人として拘束され、アンベレオへと送られた。その者たちの運命を誰も知りたいとは思わなかった。

いったい何が起こったのか、知ろうとする者がいなかったわけではない。元凶は音楽家メルノにあることは誰の眼から見ても明らかだった。が、彼女が人々の心をつかむ芸術家だったことを思い出せる者でも、そんな彼女が全市民ともいえる大人数の攻撃の的になった不可解さを説明することはできなかった。

市民たちは無残に焼け焦げた邸宅を見、総督処刑の知らせを聞き、メルノの関係者が次々と捕らえられていくのを知り、口を閉ざして家に閉じこもった。どんな理由で己自身に類が及ぶかわからないと、わかってきたからだ。

彼らは恐れ慄く。

あの美しいメッサナは二度と戻って来ないという予感で。

341.

メッサナの市街をいくらか外れたところに不可思議な場所がある。

正方形の敷地のなかに、階段状ピラミッドの上部を切り取り、平らになった場所に半円形のドームをのつけた建造物。そういうのが正方形の一边に一つずつ、計四つが配置され。それらを結ぶ線の中央には平たい建物がひとつ。平たいと言っても高さは15mはあろうか、それが平たく感じられる規模。施設の四辺は堅牢な壁で囲まれているから、外からは壁しか見えない。この壁は住宅地でよく見かける爽やかな気持ちのいい青色で

はなく、灰色の巨岩。だから公共のものでも市民のものでもないということが一目でわかるのだった。

『化学者の館』、あるいは、『天文台』と呼ばれている場所だ。名称はどちらも正しい。

中で行われているのはひじょうに専門的かつ高度な内容なので、その道の専門家か学究の徒でもなければ興味をそそられるものではない。

このように建物はそっけないが、あるじのメンドルプ氏は好人物である。よく街を散歩し、市場をのぞき、買い物をし、木陰で涼みながら居合わせた人々となんでもない雑談に興じている。メッサナのどこにでもいるような物分かりのいいおじいさんだ。とてもではないが、世界最高峰の化学者集団の長にはみえない。

そんなメンドルプ氏をたちまち好きになってしまったヤスウは、『化学者の館』に居座ろうとした。なんとといっても、居心地がよかったのである。たとえば、館内に直径十メートルの地球儀が回り、奇怪なかたちの計測器の類、薬品、器具があふれ、いたるところに奇怪な動物とも植物とも判別のつかない標本が置かれていたとしても。

しかしメンドルプ氏は穏やかに頭を振って「それはやめておきなさい」、と言った。そして、「ここにはいろいろと特殊なものがある。もしかしたら、深夜、骨格標本と人体模型が手を繋いできみの部屋を訪問するかもしれない」

「あら。おもしろそう」そういつて目を輝かせたのはマミヤである。「夜中に誰かが遊びに来てくれるの??」

「おいおい」、とヤスウはマミヤの服を引っ張る。「おめえ、骨格標本がどんなもんか知ってんのかよ？」

「ううん。知らない」

ヤスウは、はあ、とため息をつく。「ここの骨格標本や人体模型はホントに歩くかもしれないんだよなあ。あー、おれ、そういうの苦手だわ。メンドルプ先生、やっぱりやめとくよ」

「そうそう。それがいいぞ」

マミヤは少しばかり不服そうだったが、ヤスウは先に立って部屋を退出した。話の途中から自分に向けられているメンドルプの意味ありげな目配せが気になったのだ。

342.

街路へ通じる門のところでマミヤはにこやかに館の警護者に手を振っている。上背のあるごつい体格の警護者も手を振り返っていた。

「よくあっさり引き下がったな、ヤスウ」

ヤスウとマミヤと同行しているのはコモラ老人である。三名とも日よけの布を頭から被り、ちょっと見、人相風体はわからない。

「う……ん、なんだかメンドルプ先生、言いにくいことがありそうな感じだったから」

うむうむ、とコモラはうなずくのを見て、「なんだい、やっぱりなにかあるんだな！？ 教えてくださいよ、コモラさん！！」

「あそこには、貴金属の錬金工房があるのだ」

「……なんですかそれ」

小柄なコモラは横目でヤスウを見上げた。「金や銀をつくってる」

「それって——！ まさか伝説の『黄金郷』！？」

「これ。でかい声だすでない」

「す、すみません、いやでも、メッサナには金銀が泉のように湧いて出る場所があって、いつしか『黄金郷』と呼ばれるようになったって、聞いたことが！」

「知ってるなら話が早い。まさにそれじゃ。それが『化学者の館』のなかにある」

「ど、どうして！？」

「どうしてって。化学と錬金とは親戚のようなものだから」

「はあ……」

「で。その工房を熱烈に欲しがっている者がいる。誰だかわかるかね」

「……………」

「ご本家だよ。分家メッサナ市が単独で栄えていた時は本家は手も足も出せなかったが、今となっては、な。『化学者の館』もアンベレオの軍隊に踏み込まれる日はそう遠くないかもしれんて」

「そんな——」

「メンドルプ先生はおまえたちを巻き込みたくないのだ」

343.

「それにしても、だ……いったい、なにが起こっているのやら」

前総督パンテオラの実弟で現在総督代理を務めるパルダリス氏の邸宅にたどり着き、彼らはいくつもある裏口から敷地内に入る。

「『黄金郷』とは貴金属を錬金する技術と技術者を含めた総称なのだが、アンベレオ王家が欲しがっていたのは確かだ。まあ、欲しくない人間はそうはいまい。しかし、さっ

きも言ったとおり、メッサナ市が敢然と立ちはだかつて保護していた」

「ところが、そのメッサナ市が……」

「そうなのだ。不可解な事件が起き、パンテオラ総督は本国へ連行され、事件の責任を問われた。そして本国の軍隊が乗り込んできて事件の詳細を調べ始めた。まったく！物事の順序がでたらめではないか！　なあ、ヤスウ、まず第一に事件の調査があるべきなのだ！　それを！　なぜいきなり総督閣下が——！」

コモラ老はパンテオラの顧問で、側近中の側近だった。文官であった彼が総督を守れなかったのは致し方がないのだけれども、自分だけが生き残ってしまった事実は無念と後悔とで彼を苦しめていた。マミヤは、ふるふると体を震わせるコモラの手をとり、強く握り締める。

「ああ……すまない」コモラはそう言ってマミヤの手を握り返した。

「だがね……いくら考えても、わからんのだ。ひょっとして、メルノ事件はアンベレオの謀略だろうか」

「謀略って、どういう？　なんのための？」

「メッサナを落とすためだよ。メッサナの真っ只中にはアンベレオが喉から手が出るほど欲しい黄金郷がある。それを手に入れるための手の込んだ謀略——」

ヤスウはちょっとあ然とした。コモラ老は自分を責めるあまり、精神状態に異常をきたしているのではないかとさえ思った。

「え——それは飛躍しすぎじゃ。だって——そっちの領地に欲しいモノがあるからって——今は文明の時代なんだぜ、だいたいアンベレオとメッサナは親戚なんだから、外交とか話し合いとか、いくらでも歩み寄る手段はあるだろうよ——ほら、話せばわかるっていうじゃんか」

コモラは憔悴を滲ませた声音で言った。

「ヤスウよ……世の中に身内の争いほど熾烈なものはないのだよ」

344.

パルダリス総督代理は金色に近い肌とふさふさした巻き毛をもっていて、たいへんな美男子で、恰幅もよく、堂々とした態度といい、まさに神様を絵に描いたような人物である。

ヤスウは（もしかして、ヒューダーといい勝負かもな）とちよつとばかり思ったが、（いや、ヒューダーを持ちあがるつもりなんかないぜ、そんなことしたらヤツの思い上がりは手がつけれなくなるじゃねえか）などと自分に対してわけのわからない言い訳をしている。それというのも、マミヤがパルダリスのおじさんのご尊顔を拝するにあたって、めろめろになってしまったからである。それで、（こいつは顔のいい奴が好きなんだな）と思ったわけだった。

ヤスウは『化学者の館』での滞在を断られたことをパルダリスに報告した。

パルダリスは「さもありなん」といった表情で受け取った。「まあ、しばらくここに隠れていなさい。おそらくメッサナでいちばん安全な場所だ」

そして、恐縮するコモラに向かって、「じつは……ニュースが届きましたぞ」

「……と、仰せられますと？」

パルダリスはうむ、とうなった。口に出すのに抵抗があるようで、コモラはいいニュースではないのだらうと思った。

「アンベレオ王が行幸される」

コモラはいっしゅん体をこわばらせ、口を開くのに時間がかかった。「……本当でございますか」

パルダリスとコモラはそれからしばらく、じっと見合っていた。

345.

「あの一、ぎょうこう、ってなんですかね？」

ふたりがただならぬ空気を漂わせ黙って固まってしまったので、気まずくなったヤスウはわざと軽い口調で言った。

「おお……王本人がメッサナへ来る、ということだよ」

パルダリスが我に返った顔をヤスウに向けた。それから卓上に広げられていた文書をとりあげてヤスウとマミヤとを交互にみた。そのまなざしの奥には困惑が隠れていた。

「コモラ先生も聞いてください。アンベレオからの書にはこうある。

『王陛下の行幸に伴い、メッサナ市民全員の歓迎を期待する。また、当市に滞在中の旅行者、外国人は滞在を延期されることを王陛下は希望している。同行される祭司长が当市のすべてを祝福されるためである。メッサナ全市民、旅行者、外国人すべてがこの榮譽を受ける資格をもつものとする』」

「えーと、それはつまり……」

コモラは横目でちらりとヤスウを見上げた。「つまり、王様が行くから、それまで市民はもちろん、旅行者、外国人もじっと待っているということだな」

「えっ！ 旅行者、外国人て、俺らにぴったし！ いや、でもさ、俺べつにアンベレオの王様になんて会いたくねえよ！」

「王陛下の希望とはすなわち至上命令だよ」コモラの声は若干震えていた。

「この通達は君らが戻ってくる直前にとどいたもので、私も開いてみたばかりなのだが……なんという……なんという高圧……なんという暴挙……こんなことはかつてなかった！！ これではメッサナは——！！ こうしてはおれん、総督家全員に召集をかけねば！ しかし今は半分も残っていない！ ほかはパンテオラといっしょに連行されてしまったから。まったくなんということだ！！」

346.

パルダリスは総督代理の威厳など振り捨ててあたふたと席を立ってしまった。

「コモラ先生、あなたも来てください。あなたは前総督の顧問をなすってたんですから」

「そんな！ 私はパンテオラ様をお守りできなかった人間ですぞ！！」

そのやり取りを見ていたヤスウが、（コモラのじいさん、パンテオラ様の親戚衆に吊し上げられんのか）と思ったくらい、コモラ老は青くなっとうろたえていた。

パルダリスは大きく息を吸い込み、コモラをじっと見つめた。

「パンテオラ姉上を守れなかったのは総督家の責任だ。そのことについて責を問われるのは総督家全員である。誰もあなたを責めたりはせぬ。しかしあなたは生きた証人であり、多くの知恵と知識をお持ちだ。我々はあなたに力を貸していただきたいのだ！」

コモラがぼう然とうなずくやいなやパルダリスは逃がすまいとするかのようにその腕をつかみ、ヤスウたちに「まあ、てきとうにくつろいでいてくれたまえ」と言い残して大股に部屋を出て行ってしまった。

部屋を離れるとパルダリスはちらりと後ろを振りかえり、誰もいないのをたしかめてから、早口で言った。

「コモラ先生、実はアンベレオからの通達には続きがあるんです。これを見てください——」

第二十一章 『メッサナの黄金郷』

第二十二章へ続く

back number

第一部

『第一章 世界の果ての島』

はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。しかし、黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可によるものだった。

ある日、ホシナ族のもとにふたりの異国人がやって来た。ネウトラ評議会・学術調査団を名乗る彼らの目的は、絶滅危惧種である巨人族の調査だった。

『第二章 破滅の襲来』

調査行の最中に調査団長・ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤの行方がわからなくなる。やはり行方不明の巨人と同様、何者かに拉致されたと考えた調査団メンバーのヒューダーとヤスウは島を後にし、ダーヴェたちの痕跡を追う。航行中の彼らは緊急事態信号をとらえ、発信元のエウメロス王国へ急行する。

『第三章 変態』

エウメロス王国を襲った巨人族はどこから来たのか。ヒューダーはエウメロスのレルを伴って隣国ケストル王国へ。両国の国境をなす険しい山脈のふもとに作られていたのは王家の離宮と闘技場。ひとりの少年を密入国させたかどで、ヒューダーは闘技場に引き出される羽目に。決闘の相手は当の少年。この闘技場が巨人族のホームだと直感したヒューダーだったが、己がイリチャ（槍）と名付けた少年に倒されてしまう。

※・サブタイトルについて。

オタマジクシがカエルに、イモムシが蝶に形態が変わるという意味での『変態』です。別の意味ではありません

『第四章 レムリアン・ラブソディ』

ケストルの闘技場でマミヤから渡されたダーヴェの眼鏡には、夥しい量の情報が納められていたことがわかる。それは巨人族の遠い祖先の濃密な記録だった。マミヤに眼鏡を託したダーヴェは南へと向かったらしい。世界の果ての島で仕切りなおしたヒューダーたちは、マミヤ、ヘルガ王女、ダーヴェの探索、そして巨人族の襲撃に遭ったネウトラ評議会本部へ向けて、それぞれ旅立つことになる。

第二部

『第五章 メッサナ』

エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出

す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……

一方、ヒューダーはイリチャを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランクに先導させ、ダーヴェの後を追う。

『第六章 脱走巨人』

ヘルガ王女を乗せたエウメロス機はケストル機に襲われる。コタエと駆けつけたイリチャとによって全員エウメロス領側に助け出されるが、そこには巨人が待っていた。コタエたちに襲いかかろうとする巨人をイリチャが阻止するが、それはエウメロスの首都へ派遣された増援部隊から脱落した者だった。搭乗機を破壊され、国境付近の険しい高山にとり残されて身動きできない一行はそこで一夜を明かすことになる。そして夜半。レルはコタエに異変が起こっていることに気づく。

『第七章 メッサナからの逃亡』

知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。悪意に満ちた激しい攻撃を見かねた人々は彼女を助けようと進んで支援するが、メッサナ郊外でメルノはひとり放置されてしまう。後戻りもできず湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を発ってメッサナを目指していた。

『第八章 IRITIYA』

人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々とを恐怖に陥れようと画策していたのだった。メルノは死んだと報告するベネトナシュ。だが冥界の王はひそかにそれを疑う。一方、イリチャとマミヤとは、エウメロスの首都へ向かうレルらと別れ、メッサナ市を目指す。が、メッサナ総督府には異変が起こっていた。イリチャは外部の隠れ家に潜んでいたコモラを探し出し、パンテオラ総督がアンベレオ本国の兵士に連れ去られたことを知る。

『第九章 原子の火』

のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理を務めることになったパルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナが抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。2011年の原発事故を踏まえた『火精霊に聴く -原子の火に関する一問一答-』を収録しました。

『第十章 二極世界』

死神はメッサナの金脈がアンベレオの手に渡ることを好まない。その思惑は、アンベレオ王家とメッサナ総督家との全面的対立へと向かわせる。それは多くの物資をアンベレオ王国に依存する諸国と、

知と美をメッサナから持ち帰った各国の人材たちとの対立へと発展する様相を見せていた。また、メッサナ化学者集団は巨人族対応を巡ってネウトラ評議会と対立する。ヒューダーの要請に応じるイリチャの旅立ちをひとりで見送るヤスウ。並外れた知と美の都の凋落が、ヤスウの目の前で始まろうとしていた。

第三部

『第十一章 天津甕星』

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住民の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。

ホシナ族と交わるうちに美しい青緑色の幻獣を見かけ、ますますホシナの地に惹かれるアマセオだった。

そんな中、アマセオの実家の使者がやってくる。使者が持ってきた知らせは、アマセオの妻に子どもが生まれたというものだった。族長夫人のオマキは大喜びするが、アマセオは激しく動揺する。生まれた子は三つ子。アマセオ自身も三つ子だった。それは生まれてはならない者だったからだ。

『第十二章 機織り族の野望』

王に献上された見事な織物。かつて王の正后に贈られた腹帯と同じ材質のものに見えたオモイカネは、それに触れたとたん、激烈な反応を体験する。現政権の日読みを司る彼は、王に危害が及ぶ懸念からその織物を預かる。

一方、赤子と妻に会うため、帰郷したアマセオ。故郷は鳥を守護神とする神聖な織物の郷。妻の兄、タマシギと語り合ううち、タマシギが一族の持つ織物の権利の維持と織物の技術開発に並々ならぬ意欲を持っていることを知る。家を追い出され、家業に興味のないアマセオだったが、タマシギに対して違和感を覚える。そんななか、アマセオの子が怪鳥にさらわれる事件が起きた。

『第十三章 アマセオとカガセオ』

鳥の化け物がシトリを襲い、三つ子を連れ去った。三つ子の父親・アマセオは化け物を追う。シトリ一門の将来について、追放同然とはいえ嫡男であるアマセオと考えが食い違うことに気づいたタマシギは、この事実を即刻政庁に報告する。

報告を受けたフツヌシは、アマセオがかねてよりホシナ族と接近していることを懸念していた。この国の仕組みは北極星を中心としている。一方、はるか過去に石器と狩りの技法と共に北からやって来たホシナ族は金星に導かれていたからだ。しかしこの国にとってホシナ族はなくてはならない存在であることがフツヌシを悩ませる。

アマセオの子をさらったのは、出生後に殺されたはずのアマセオの弟だった。弟はシトリの後継者であるアマセオの力になるべく、殺された後タマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。ところが、タマシギの目的のためには手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

『第十四章 ヤサカオ 立つ』

ホシナ族の黒曜石事業拡大は政府から仕掛けられた罠だった。権利の拡大解釈を理由に、政権の軍部を司るフツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。フツヌシはまた、アマセオを陥れる訴えをも

タマシギから受けていた。

夜陰に紛れてホシナ族の地を訪問したスクナは、アマセオにすぐにこの地を離れるよう進言する。フツヌシの狙いを攪乱するためだった。そしてスクナは、タマシギに憑依したカラスの正体を知る。ミツハの中のメルノは言う。それは死神だと。

死神の登場に動揺したメルノはホシナ族を抜けようとするが、スクナから厳しい叱責を受けるのだった。

一方、アマセオと懇意の仲のヤサカオは、ひとつ問題を抱えていた。ホシナ族を存続の危機に陥れ、ホシナの娘マミヤ失踪のもととなった事件を起こしたゴンがヤサカオの息子だった。族長ホシナがゴンをホシナ族の者として扱ったため、ヤサカオの名は表沙汰にならなかったのだ。そのことを恩義と受け取ったヤサカオは、ホシナ族にかわってフツヌシを迎え撃つ。

『第十五章 ふたつの北極星』

かつて名を奪われ、取り上げられたわが子が意外にも近くにいると知ったミツハは彼女本来の力を取り戻し、カラス-死神と対決する決意を固める。

一方、フツヌシの軍団のひとつが農村を襲って村人を人質にホシナ族に投降を迫り、ホシナの郷をも襲おうと謀る。ホシナ族はもはや退路は断たれたと知り、そのやり方にアマセオは失望と怒りを覚え、フツヌシ、オモイカネに政府の真意を問いたです。

オモイカネは、現王の後継者を巡って政府内で陰謀が渦巻いていることを語る。王と深い関係にあるホシナ族は陰謀の犠牲になり、ヤサカオ族と共にフツヌシを負かしたアマセオは王位を巡る者にとって脅威的な存在になっていたのだった。

はたして、ホシナ族とアマセオの行方は。

第四部

『第十六章 トゥランの七つの洞窟』

冥界王に無断で世界の果ての島に手を出した死神は冥界王の怒りを買って、ついに見放される。

一方、ケストルの追撃を逃れた王女ヘルガはついに故国に帰還。信用のおける側近らと情報を交わすうち、ネウトラ評議会が巨人族の襲撃を受けて壊滅状態であること、また、メッサナ市に異変が起こり、封鎖されたことがわかる。そんななか、エウメロスの地下シェルターに逃れてきた黄金門市の皇帝は、エウメロスの生存者全員を地下シェルターに収容し、ひとつしかない入り口を塞ぐことを提案する。大陸の下には遠い過去に造られた巨大な都市があり、エウメロスの地下シェルターはその都市から伸びた枝道のひとつだった。皇帝の一族は驚異的な力をふるって地下道掘削に取りかかる。

『第十七章 ブルー・マーキュリー遭難』

巨人族を殲滅させるべく原子炉製造に意欲を燃やすティコ博士に頼もしい協力者が現れた。評議会西支部のコパーン博士である。メッサナ化学者団と決裂してしまったティコは、コパーンの進言を取り入れ、原子炉から原子爆弾へと舵を切っていく。その様子を耳にした黄金門の皇帝は、評議会には専門家がないのだと見抜く。いずれにしても地下へ潜ってしまったエウメロスには無関係なことだと思われた。ところが事態は急変する。コパーンがティコへ送った無人偵察機が行方不明になった。偵察機は爆弾の製造仕上げに使うブルー・マーキュリーという素材を掲載したまま、ケストル北方、氷河地帯でコントロール不能になったのである。ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流さ

れた原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっているバイスロイ救出に動き出す。

『第十八章 王女の冒険』

ケストル王国に向かったスクナとヘルガは、途中、アマセオと出会う。彼はホシナ族と行動を共にしてきたが、ホシナ族が安全な場所で逗留中、単独行動をしていたのだった。スクナらが大任を負っているのを知り、アマセオはケストル北方へと偵察にむかう。

ケストル王パウルと対峙し、国民らに避難を呼びかけたヘルガはバイスロイが王都にいないことを知る。彼は離宮へ招待されていたのだった。ヘルガにはおぞましい記憶の残る場所だったが、バイスロイ救出に急行する。しかし王都よりずっと北にある離宮は決壊した氷河に吞まれようとしていた。

『第十九章 ミクトランへの道』

ケストル闘技場からエウメロス地下シェルターへ移されたアマセオ。レル・ヴァリスは彼自身が保管していた闘技場の見取り図とアマセオが持ってきた情報が一致していること、そしてかつてダーヴェのメガネを解析したコタエの記憶から、ケストル闘技場には巨人族が出入りしていた機構があることに気づく。一方、破壊されつつある闘技場地下にある渦に飛び込んだバイスロイらはどこにも知れぬ場所に到達。バイスロイは到達地の特徴から、それが太古に失われた転送システムであると知る。

第五部

『第二十章 冥界の巨人』

バイスロイ一行を出迎えたのは、ネウトラ評議会のダーヴェ。ダーヴェはケストル闘技場から転送システムを使ってミクトランへ来たのだった。同じ方法で多くのケストル人がミクトランにやって来ていた。いくつもの事情で母国へ帰れなくなったケストル人は、ダーヴェらをつけ狙った。彼らは、転送システムのパスの機能をもつ『評議会の身分証』をもたらしした人間、ヒューダーをも恨んでいたのである。地上帰還の可能性がきわめて低いなか、ダーヴェたちは最大の謎、巨人族がどこからやってくるのかを解こうとしていた。

第二十一章のあとがき

第九章『原子の火』の冒頭で下記の文章を引用しました。

『われわれははっきりと立証しよう。黄金作りなどはそれほど重視していないし、たんなる副業としかみていないことを。そしてこういおう。“フィー・アウルム・ユシ・クントウム・アウルム” …なんだ黄金か、たかが黄金か…と。なぜなら全自然が解き明かされている者にとっては黄金がつくりだせることなど、悪魔が自分自身に従順であるのと同じくらい、少しも喜ばしいことではないからである』

フランセス・イエイツ 山下知夫・訳 『薔薇十字宣言』の一節

かつて、黄金はいくらでも作り出せるものだったらしい。同時にアメリカ大陸南北にわたって金鉱探しはひじょうに熱心に行われていたらしいし、じっさい、存在したらしい。それで黄金郷伝説というのがとくに南米に残っているのですね。先日発行しました『originaltext #512』はそういう黄金郷を調べるうちに見つけた話です。ですが、ここでは黄金を作っているという方に照準を定めたいと思います。

ぜんぜんあとがきじゃないじゃん。というあとがきでした。

表紙の背景ですが、前の二十章のは『[フェイエルヴァーリ・マイヤー絵文書](#)』の図像、今回二十一章のはティコ・ブラーエの『ウラニボリ天文台』です。

2023年8月7日 記

奥付

Salamander in the circle

第二十一章 メッサナの黄金郷

2023年8月10日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#) blog [D & R](#)

表紙素材 [「月とサカナ」](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
